

ソクラテ斯的対話の実際とその方向性 ——7th International Conference: Philosophizing through Dialogue に参加して——

太田 明

要 約

レオナルド・ネルズンはドイツの哲学者・倫理学者・教育学である。彼は1922年にゲッティンゲン大学で行った講演「ソクラテス的方法」で基づく哲学と哲学教育の方法を提案した。「ソクラテス的方法」とは、プラトンによる『対話篇』における対話とは違って、そこに参加する誰もが他の参加者に対して〈産婆〉となりうる集団的会話である。

2013年夏、このネルズンに由来するソクラテ斯的対話（SD）の第7回国際会議が開催されたベルリン郊外のヴァーンゼーで開催された。この論説の目的は、この国際会議とそこで行われたソクラテ斯的対話、およびその元になっているSDの理論と実践を紹介することである。

この論説は次のように構成されている。まず、SDの歴史・規則・哲学的基礎を簡単に説明し（1）、ついで今回の国際会議の様子と（2）、筆者が参加したあるSDのセッションを紹介する（3）。最後に、現在におけるSDの3つの検討課題を取り上げ、これらはみなSDの特徴とみなされる「遡及的抽象の方法」に起因することを確認する（4）。

キーワード：レオナルド・ネルズン、ソクラテ斯的対話、遡及的抽象の方法、子どもの哲学

はじめに

ゲッティンゲン大学の哲学者・教育学者であったレオナルド・ネルズン（Leonard Nelson, 1882-1927）は、哲学実践（philosophieren）の方法として、また哲学教育の方法として「ソクラテ斯的対話」（das sokratische Gespräch, socratic dialogue, 以下、SDと略記）を提唱した。それは、通常は二人でされるソクラテ斯的対話に対して、どの参加者も〈産婆〉として他の参加者の思考を生み出すことに寄与する機会をもつ集団的対話である。

ネルズンに由来するSDに関しては、私自身のものを含めてすでにいくつか紹介がある¹⁾。しかし、SDは文献や資料による研究ではなく、まさに対話の実践と反省によってはじめてその真髓が理解できるものであろう。

SDに関する第7回国際会議が2013年7月26日から31日までベルリン郊外ヴァーンゼーで開

催された。幸運なことに、私はこれに参加する機会を得て、初めてSDを実際に経験することができた。本稿の目的は、この会議と私が参加したSDの実践を報告し、そのSDに若干の分析を加えるとともに、SDに関する研究の方向性を見出すことである。まず、SDの歴史と理論を簡単に説明し(1)、ついで今回の国際会議に関して報告する(2)。特に私が参加したSDを再現し、それに若干の分析を加える(3)。最後に、SDの現代的な方向性について触れる(4)²⁾。

1. SDの理念と方法

まず、SDの理念と方法について簡潔に確認をしておく。

1.1. SDの歴史

レオナルド・ネルズンは新カント派の哲学者ヤコブ・フリードリッヒ・フリース (Jacob Friedrich Fries, 1773-1843) に私淑し、その哲学を受け継いだゲッチンゲン大学の哲学者である。フリースはカント哲学のいわゆる「心理主義的」解釈で知られ、ネルズンもその系列に属する。19世紀末から20世紀初頭においてはさまざまな新カント派が生まれたが、西南学派やマルブルク学派に比して、心理主義的解釈の哲学史上の評価は高くない。ネルズン自身、当時ゲッチンゲン大学にあったエドムント・フッサールとは学問上の対立があり、容易に学位請求が認められず、数学者ダビット・ヒルベルトによってようやく学位取得がなったと伝えられている³⁾。

カントはその著作『啓蒙とは何か?』でヨーロッパ思想の画期的な時代のモットーは「自分の理性を使用する勇気を持って!」(Sapere Aude!)であると述べているが、カントのこの思想にそって、ネルズンは自らの教育哲学を精力的に展開し、自力で考えること、言い換えれば自己指導的学習の構想を自らの教育哲学の中核に置いた。学習者にとって、これは個人の自律性の成長を理性の能力の発展に組み込むことを意味する。

そこにはネルズン自身の学校経験が色濃く反映されている。ネルズンは当時の、つまり19世紀から20世紀への転換期における学校生活に失望していた。それは「真の精神的(また身体的)な活動の欠如と、機械的で生氣のない教育内容のお仕着せ」にすぎない。こうした教育内容に失望したネルズンは15歳の時に「フォン・フリースの哲学の研究に着手し、これに…魅了された。理解が困難で忘却されていたフリースの仕事を集め、それらを集成した」⁴⁾。

こうしたフリース流のカント哲学理解を経て、1917年ネルズンは自らの哲学教育の方法に関する構想を「自己信頼への教育による心情の改革：前書きと序説」(Nelson 1971, S. 241-245)で公にした。この延長上に、1922年12月11日にゲッチンゲン大学教育学協会で行われた講演「ソクラテス的方法」(Das sokratische Gespräch) (Nelson 1970)がある。これが今日までSDのもっとも基本的な文献とみなされている。ネルズンはSDが探求と理性の能力の育

成に特に適したものと考えた。この方法は、学習者が、共同のグループ対話を通して、自分の内的経験に関する知識を得て、ある哲学的問いに関する真理の洞察に至る学習＝教育過程からなる。この過程には教育者（教師）はおらず、その代わりに対話の進行役（ファシリテータ）が置かれる。学習者はファシリテータによる指導を受けるが、ファシリテータは対話の舵を取るだけであって、学習者の探求の内容には影響と及ぼさない。

プラトンの初期『対話篇』をみれば、ソフィストたちだけではなく、普通の人々もソクラテスの対話相手となっている。そこには専門家のためではない哲学実践がある。そうだとするならば、SDは大学における哲学教育だけではなく、むしろより広い教育分野への展開が視野に入れられるはずである。学校や教育機関の授業では、理論と実践は往々にして切り離される。しかし、理論と実践が、アカデミックではない日常生活の問題に関する知に関係している場合、両者を切り離すのはそれほど容易ではない。例えば、人々が人生について判断する方法はいつも変わらずに日常生活での行動について指針を与える。実際、ネルズンは当時の社会主義運動に共鳴し、IJB (Internationaler Jugend-Bund) を設立し、ISK (Internationaler Sozialistischer Kampfbund) と関わった「倫理的社会主義者」でもあった。

自らの教授活動のなかで・ネルズンは理論と実践の統一を探求し1922年、カッセル (Kassel) 近郊の村メルズンゲン (Melsungen) に自ら「ソクラテス的方法」による実験的寄宿舎学校 (ヴァルケミュール学校: Walkemüehl Schule) と成人学校「哲学的政治アカデミー」 (Philosophisch-Politische Akademie: PPA) を設立し、自らの教育構想を実際の状況で確認しようとした。ヴァルケミュール学校とアカデミーの教師はSDを取り入れた教育を行った。しかし、ネルズン自身は早逝し、1933年以降、学校とアカデミーはナチ体制の下で閉鎖された。だが、ネルズンのアカデミーに参加し、彼が支援した政治活動に参画した人たちの多くがヒトラーに対抗する反ファシスト闘争のアクティブな地下運動家となり、また学校関係者は子どもやその親とともに、デンマークやイギリスに亡命し、その地で新たな学校を設立した。第二次大戦後、1949年にPPAはドイツで再建されたが、学校の再建はならなかったはならなかった⁵⁾。

SDや学校を継承し発展させたのは、ネルズンの学生であったグスタフ・ヘックマン (Gustav Heckmann: 1898-1996) とヴァルケミュール学校の共同運営者にして教師であったミンナ・シュベヒト (Minna Specht, 1879-1961) である。ヘックマンはネルズンのSDの構想をさらに進め、その方法論を発展させた。ナチス政権下では、ノルウェー、イギリスに亡命し、そこでSDの実践・理論を展開した。戦後はドイツに戻り、ハノーファー教育大学の教授職に就いて、SDを用いた学習＝教育における対話や教師教育に尽力した。ヘックマンの主たる関心は、将来の教師が独立した人格を発展させ、自己指導教育への能力を高めるとともに、子ども・青年・大人のあいだに理性的な判断を引き出す能力を発展させることにあった。ミンナ・シュベヒトはヴァルケミュールで教師としてSDを実践したが、大戦中はデンマークに亡命し、オードロップゴー (Oestrupgaard) に学校の子ども部 (幼稚園を含む) を継続する可能性を見出し、5年間を過ごした。戦後は帰国し、有名な田園寄宿舎学校オルデンヴァルト・シューレ (Oldenwald

Schule) の校長を務め、後にはハンブルクのユネスコ国際教育研究所で活動した。

1.2. SDの特徴

SDの基本的性格を一言で言えば、それは真理を共同で探求するための集団対話という活動だということであり、その基本目標は次の点にある⁶⁾。

- ・ある概念の本性に関する真理を見出すことによって哲学的問いに答えること；例えば、寛容、自由、正義、責任など。そして、合意に達する努力、すなわち、ある結果ないし成果を得る努力をすることである。
- ・問いに対する回答を探す共同活動に参加し、具体的な経験の探求を通して相互に理解し合うこと。さらに参加者からの申し出によって、通常、そのうち一人がグループによって選ばれて、対話の詳細な分析を行う。このようにして全員が対話の過程に参加する。
- ・対話の過程が進むにつれて、参加者が日常世界の道徳的に厄介な問題を把握できるようになるが、それによって個人的な洞察や理解を深める。
- ・対話の過程を通して、考慮し熟慮した合理的行動とそうでないものを一層明白にする。こうして自らの理性能力への自己確信を強化し、生活へのアプローチを鋭くすることができる。

より抽象的に言えば、SDは二重の目標を持つ。SDで取り扱われる事象に関する目標とSDへの参加者の態度に関する目標である。事象に関しては、普遍的な問いに対して、共同の思考によって普遍妥当的な回答を得て、それに関して参加者の合意をうることである。参加者の態度に関しては、思考することに対する自分の能力を信頼し、同時に対話に参加している他者を尊重することである。したがって、自ら思考しつつ共同で合意に至るといふかたちで哲学実践を行い、同時に、その議論による対話・会話に参加することで同等に他者を扱い尊重するという態度を得るのである。その意味で、SDは哲学教育を越える目標を持っているといつてよい。

この目標に応じて、SDは次のように組織される。通常、「対話」とは二人の人間の言語を介した議論による交流である。プラトンによって描かれたソクラテスの活動はなるほど対話ではある。だが、この対話はソクラテスと数人の参集者のうちの一人だけとなされ、しかも多くの場合、ソクラテスの長広舌が大半を占める。この傾向はいわゆる『対話篇』の後期になるほどはなはだしくなる。それに対してネルズンは哲学実践と哲学教育の方法として「ソクラテスの方法」を提唱したが、その新機軸はまさしく、参加者全員が同等に発言して議論するという仕組みを提案したことである。

SDは複数の参加者と1-2名の進行役（ファシリテータ）で構成される。参加者は2名以上のあまり多くない人数である。10名程度が適切であるといわれる。そこにファシリテータが参加する。しかしファシリテータはけっして議論の内容には参加せず、通常は、以下に述べるSDの規則に従った議論の進行を円滑にすることだけを行う。また議論の記録（プロトコール）

を作成し、議論の鍵となる命題を黒板やフリップ・ボードに書き留める役割をはたす。中心になるだけか一名とその他の一名の間の議論ではなく、参加者すべての同等の議論が組織されるという意味でSDは「対話」(Dialog)ではなく、「会話」(Gespräch)というほうが適切かもしれない⁷⁾。

この対話は現在のSDにおいては次のような方法的規則にしたがって進行する⁸⁾。

1. 自分自身で考えたこと、それが真理であることを本当に確信していることだを表明せよ。
2. 本当に疑っていることを表明せよ。悪魔の代弁者 (advocatus diabolic) を演じてはならない。
3. 自分の考えをできる限り明晰に語れ。
4. 他の人が語ることを注意深く聞き、他の人の考えを理解するように努めよ。
5. 自分がある判断に一致できるか常に検証せよ。
6. しかし真面目な疑問を用意し、それを差し控えるな。他のすべての参加者がその判断を正しいとする場合にも、遠慮するな。
7. 参加者全員の合意をうるように努力せよ。

現在の規則はネルズンが提案し、その後ヘックマンが改良したものである。たとえば、ネルズン自身は参加者全員の合意の調達をまったく重視しなかったが、ヘックマンがこれを加えた。その意味で、ネルズン-ヘックマンに従う(あるいはネルズン-ヘックマンの伝統のもとにある)SDと表現される場合がある。

SDにおいてはこれらの方法的規則がきわめて重要であり、参加者もファシリテータも、上記の方法的規則を守ることに、SDの成否がかかっている⁹⁾。参加者はこれらの規則を遵守し、そのためには寛容と忍耐を必要とする。それに対してファシリテータは、参加者がこれらの規則に従って対話に参加しているかを確認し、逸脱があれば、注意を促す。しかし対話のテーマに関する自分の意見を表明したり、議論に直接介入することを差し控えなければならない。

このような点を確認すれば、SDはなるほど集団的な議論の一形式ではあるとしても、いわゆるディベート (Debate) とはまったく違うことが分かる。SDでは決して口角泡を飛ばすような論争はない。相手の議論の弱みを突いてやっつけたり、意見を引っ込めさせたりして、自らのポイントを稼ぐという作戦もない。そもそも対話者自身以外に評価者はいない。SDは静かに始まり、静かに議論を交わし、静かに終わる。というのは、SDでは了解は共感・脅し・示唆・共同の興味の発見を通して得られるのではないからである。そうではなく、(自己)批判的議論、つまり根拠と反対根拠の共同の探求を行い、それによって参加者自らの意見を吟味するものだからである。

また、SDが成功するためには一般的に行為への圧力から解放されていなければならない。対話参加者が相互に議論するのは、決定を下すためではない。真理を探究するのである。行為への圧力に曝された現実社会では、対話の終わりには、譲歩・交渉の成果・多数決決定・権威による裁定がある。しかしSDの場合、対話の終わりは合意であり、討論が不首尾の場合には、

意見の相違である。SDは合意を志向するが、その合意は異論の余地を含むものである。つまり、合意は真理に到達するために最も適した補助手段であって、それ自身が真理規準と見なされることはない。合意に向けてソクラテス的対話者は努力するのである。

SDの実践の進行に関しては次節で検討する。その中心にあるのはネルズンの言う「遡及的抽象の方法」(Methode der regressive Abstarktion, method of regressive abstraction)である。これはNelson自身の哲学研究方法であり認識批判の方法でもあるが、その根本前提は「理性の自己信頼 (Selbstvertrauen der Vernunft, Self-Reliance of Reason)」である。それは次の3重のあり方をとる¹⁰⁾。

- ・ 理性の有意味性への信頼：理性は私的あるいは公的生活におけるわれわれの決定と行為を方向づけるために有意味であるという点についての信頼
- ・ 真理の可能性に対する信頼：つまり、真理は存在し、真なる命題は可能であるという信頼
- ・ 認識の可能性への信頼：認識の可能性に対する信頼：つまり、真理に対する個人的洞察、たとえば命題の真偽に関するより高い確実性を共同の思考で獲得する能力が理性的存在には可能であるという信頼

1.3. SDの実践

SDは対話実践であり、それを完全に記述することはほとんど不可能である。ネルズン自身もSDの実践をヴァイオリンの演奏に喩えて、こう述べている。「私はバイオリンと同じような当惑を感じる。つまり、どうすればバイオリンをうまく演奏することができるかと問われるのだが、どうやってバイオリンを始めるのかを概念で事細かに説明することはできないのだ」¹¹⁾。したがって、以下に示すSDの対話の進行は理念型的なものにすぎない。

・ テーマ設定

SDで扱われる問題は、たいていの場合、哲学的問題内容にかかわって定式化された問いであり、それが最初に与えられる。ヘックマンは否定的なかたちで次のように説明する¹²⁾。

「SDでわれわれが対象とするのは、対話へのあらゆる参加者が利用できる、経験を反省するための方法である。それゆえ、それ以外の方法によって単に答えられうるような問いは除外される。そのような方法とは、1. 自然や研究室のなかでの実験・観察・計測、2. 社会科学において一般的に用いられる経験的調査、3. 歴史的研究、4. 人間の個人的な精神の問題を暴露しようとする精神分析的方法がそうである。私が見る限り、ソクラテス的対話において、これら4つの方法のうちのどれにもあてはまらないすべての問いに手を出して構わない」(Heckmann, 1993, p. 14f.)。

・ 実例の提出

対話参加者はみな自分の体験から経験を取り出す。分析のための実例を提供することになる。ひとつの実例が選択されると、その提供者によってさらにもう一度より詳細な説明がなさ

れる。他の参加者が了解しがたいところは何度でも問い直される。そうした問い直しは、物語られたものの解釈や操作になってはならない。そうではなく、すべてのものにとってより深い理解をもたらすし、グループの共通の経験に寄与するものでなければならない。のちの探求にとって重要だと思われる側面を簡潔な文章に書き留めて確認される。

・実例の分析

実例の分析は、参加者たちが真剣に持ち出すいろいろな質問から始まる。これは、テーマ設定の側面に関係した実例についてのできるかぎり具体的な問いであり、それを議論によって説明することで、テーマとの関係がより明確になるのである。こうした質問を集積した後で、適切な問いが分析のために選択される。ここでは、ファシリテータは、対話の「導きの糸」が保証されると同時に、あまり拙速に次の段階 — 抽象 — が行われないように注意する。これは、主観的に重要な共通の思考をできるかぎり深めることを保証するためである。

・真なる命題の議論を通じた探求（遡及的抽象）

対話が進行するにつれて、実例から出発して合意可能なより普遍的な命題を見出すことが行われるが、この命題は繰り返し、共通の具体的地平としての実例にもとづいて判断される。参加者がみな確信から一致できるまで続く。ヘックマンはこの合意形成過程を自らの経験から次のように記述する。「これはたいていの場合、すべての立場のうち一つの立場が受け入れられ、反対のものが全ての点で非難されるというふうにはならない。より頻繁に生じるのは、意見の一致である。それは、検証に耐えない諸要素の二つの立場のそれぞれが開放され、それによって両方の立場の真理の核がより純粹に姿を現す。二つの立場はもはや相互に矛盾することなく、相互に補完しあうようになる」(Heckmann 1993, S. 10.)。ファシリテータは合意形成過程において内容的には関与しない。

・対話の終わり

テーマに関して普遍的原理が見出され、それについて合意が得られれば対話は終わるはずである。だが、実際にどのようにして対話を終えるかは難しい。テーマに関して説明しつくされて、意見は出てこないという感じを参加全員がいただければ、対話は終わらざるをえない、哲学的テーマの場合にそうなることは稀である。むしろ時間的な制限という理由によってSDは終わらざるをえないのである。見出された合意も最終的なものではなく、暫定的なものと思なすべきである、つまり、状況や時間が許すならば、さらに探求されるべきものである。その意味でSDは無限に続くといってよい。

・メタ対話

「メタ対話」はヘックマンによって方法に導入された段階である。「この終わりの位置では、探求する事柄に関する対話が、対話に関する対話によって中断される。それは次のモットーで述べられる：どんな不愉快も分節化されねばならない。ここで主張されるのは、議論活動において満足できなかった事柄である。それは参加者個々人やファシリテータの振る舞いであるかもしれない。その原因を知ることができない対話の鈍重さ、妥協のなさ、見通しの悪さである

かもしれない。うまく対話が進んで満足し、どうしてそのように対話がうまく進んだのか明らかになったということが表明されるかもしれない」(Heckmann, 1993, S. 9)。メタ対話という道具はさまざまな機能を持つ。メタ認知の意味で規則や方法の意識化を強化したり、対話に関する批判的反省に当てられる。あるいはまた、一週間にわたるソクラテスの対話の時間の長さや対話でのグループ・ダイナミックスなどである。いずれにせよ、対話の進行、方法、雰囲気、グループ・ダイナミックスへの問いについてそれを解明する場を与えるのだが、これは対話自身にとっては一種の負担免除の機能を有し、それによってかえってテーマに集中して対話が促進されることが期待される。

1.4. 遡及的抽象の方法

ネルズン－ヘックマンの伝統におけるSDで、その核心となる方法は「遡及的抽象の方法」と呼ばれる。ネルズンによれば、これは哲学思考一般の方法であり、またSDにおいても適用可能である。それゆえに、SDの理論的・実践的研究の一つの焦点が、この遡及的抽象の方法の解明であり、同時に、これをどう理解し、評価するかによって、SDそのものの理解が変わってくる¹³⁾。

「遡及的抽象の方法」は、ごく簡潔に言えばつぎのようになろう。哲学的に思考することとは、不明確な(暗黙の)知識としてわれわれの中に常にすでにあるものについて明確なかたちを与えることであり、暗黙のうちにあった知識を明らかにすることによって、明確で吟味された知識を探求することである。探求は、探求されるべき实例を示す具体的判断から始まり、一步一步、そのもとにある前提に遡り、徐々に普遍的判断に至るのだが、(遡及)、その過程で、判断に含まれていた経験的偶然性は徐々に解消されてゆき(抽象)、最後に原理に到達する。ネルズンは次のように言う。「もし(判断に対する)可能性の条件について問うならば、なされた個々の判断の基準を構成するより、より一般的な命題が問題になる。与えられた判断を分析することにより、われわれはそれらの前提に立ち返る。結果から根拠へと遡及するのである。この遡及において、われわれの判断に関わる偶発的な事実を取り除き、そしてこの分離によって、その具体例における判断の根底にある暗黙の前提を明らかにするのである」(Nelson 1970)。

ここでは2つのことが言われている。第1に、ある判断のもととなっている前提を十全に導き出すためには「偶発的事実を取り除く」かねばならない。これは抽象の一面であるが、それは単なる除去作業ではない。第2に、は思考や議論の遂行の遂行は特定の経験に基づく判断を出発点とするプロセスであるから、簡単に切り取って縮めてしまうわけにはいかない。その意味で、抽象とは、哲学的な問いに答えながら「抽象的な」言明を見出すことである。

ネルズンは、こうして得られる哲学的認識は非直観的な「直接的認識」であり、さらにそれは「心理学的認識」によって検証されるとした。ある命題が原理であることは、理性がそれを

直接的認識と認めることによってしか証明する方法がない。これがネルズンの言う「理性の自己信頼」であり、これがなければ、そもそも疑うということすらできないのである¹⁴⁾。後に見るように、ここにはSDの根幹に関わる大きな問題が含まれている。

この過程を説明するためによく引き合いに出されるのが「砂時計モデル」(図1)¹⁵⁾である。このモデルでは、SDの過程は次のような図式で示される5段階で説明される。

1. 一般的な問い
2. 実例の検討
3. 具体的判断
4. 判断に基づく規則や価値
5. その下にある原理

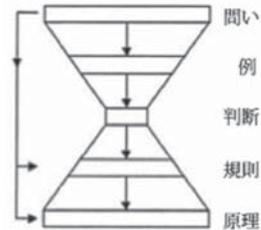


図1 砂時計モデル

最初に、一般的な問いが与えられると、われわれは実際の経験やそれに関係する例を見つけ、それを検討し、それに判断を下す。実例や判断に応じて、合理的で一般的な洞察を得るために、共に考え議論する。これらの洞察は日常生活における決断や行動規則や価値に関わる。それは抽象的な言明へと定式化され、その背後にある規則、基本的原理、価値などとして理解されるべきものである。

遡及的抽象は、状況や出来事の記述からではなく、ある状況での出来事についての判断から出発する。砂時計の括れた部分（判断）から出発し、土台（原理）へと向かう。遡及的抽象は状況やできごとの記述から直接出発するのではなく、ある状況でのできごとについての判断から出発して原理へと向かうのである。

また、SDの研究グループKopfwerk-Berlinは、SDの実践を視野に入れて、これを次のような問いと応答との連鎖として捉えることを提案している¹⁶⁾。

1. 判断：ある状況Sに直面して具体的な経験に基づいた判断JがPであるということ（ある決定や行動は正しい、など）を意味する。
2. 応答1
 - ・ 問い：状況Sにおける経験に基づく判断Jはどのような事情や規則に基づいているか？
 - ・ 答え：Pということの意味する経験に基づいた判断Jは、状況Sにおける規則Rに基づいている。
 - ・ 言い換え：判断Jは状況Sにおける規則Rの正しい適用の結果である。
3. 応答2
 - ・ 問い：状況Sにおける規則R（の適用）を支持する根拠となる原理（や価値）があるか？

- ・ 答え：原理P（価値V）は状況Sにおける規則Rを適切な/正しい規則として採用する根拠となる。
 - ・ 言い換え：判断Jは状況Sにおいて規則Rを正しく採用した結果であるという主張は正しい。なぜなら状況Sにおける規則Rを支持する原理P（価値V）があるからである。
4. 追加：経験に基づいた判断Jを受け入れる人は誰でも，原理P（価値V）を受け入れる。なぜならP（V）は規則Rの根拠であり，RをSにおいて正しく採用するのはJに繋がるからだ。

後にこの捉え方を実際のSDの一つに適用してみることにする。

2. 7th International Conference in Berlin

国際会議の正式名称は“7th International Conference: Philosophizing Dialogue-Dialogisches Philosophieren”である¹⁷⁾。4年毎に開かれ、今回が7回目である。2013年7月26日から8月2日、開催地はベルリン郊外ヴァーンゼー（Wannsee）のクララ・ザールベルク・セミナーハウス（Bildungs-und Begegnungszentrum Clara Sahlberg）で開催された。ヴァーンゼーは「ベルリンの壘」と呼ばれ、夏には水浴客でいっぱいになるが、周囲は緑豊かな高級住宅地でもあり、ポツダム会議に参集した連合国首脳が宿泊した住宅もある。また、セミナーハウスの近くにはナチス政権下でユダヤ人絶滅計画を決定した会議場（Conference House）が記念館として残されている。

今回の国際会議はSDに関連する3団体と1大学部局（the Philosophical-Political Academy (PPA), the Society of Socratic Facilitators (GSP), the Society for the Furtherance of Critical Philosophy (SFPCP) and the Institute for Comparative Ethics (Freie Universität Berlin)）によって共同で組織された。

PPA（Philosophisch-Politisch Academy）は先に触れたように、批判哲学の促進のための団体であり、ネルゾン（1882-1927）とその支持者たちによって、批判哲学を社会と政治に適用するために設立された。その点からすれば、ネルゾンにおけるソクラテス的方法是政治教育と密接に結びついていた。PPAはナチによって禁止されたが、1949年に再建された。現在は、政治的・哲学的主題に関する会議の組織、書籍公刊の援助、学術賞の選定とともに、ソクラテス的対話のセミナーをサポートしている¹⁸⁾。

GSP（Gesellschaft für Sokratisches Philosophieren）は、実践と理論において、ネルゾンとその方法をさらに発展させたグスタフ-ヘックマンの伝統におけるソクラテス的対話を進展し、ファシリテータのトレーニングを行うことを目的にして設立された団体である。ソクラテス的対話コースに所属するメンバーは、PPAの協力のもとに、ドイツの各地方でGSPによって組

織されている。1980年代から毎年4-5回のファシリテータ養成コースやゼミナールを開いている。それらに加えて、ソクラテス的対話の方法論に関係する年次大会を主催し、年報『ソクラテス的哲学実践』(Sokratisches Philosophieren)を出し、SDに関する議論を促進する場を提供し、重要な論文を掲載している。また、GSPはソクラテス的対話の力量を備えた学校教師のトレーニングにも力を入れている。

SFCP (Society for the Furtherance of the Critical Philosophy) は1940年に英国に設立されたPPAの姉妹教育慈善団体である。第二次世界大戦時、ヴァルケミュール学校がナチスから逃れてイギリスに避難した際、それを援助した。その後、この団体の目的は顕著になり、支援は哲学関連学会、出版、機関紙発行を支援している。SDの研究支援、教師のためのセミナーの開催とともに、『倫理と批判哲学における論文集』(The Occasional Working Papers in Ethics and Critical Philosophy) を発行している。

また、ベルリン自由大学比較倫理学研究室は、ハンス・ヨナス研究センターと関係が深く、その所員にはSDのトレーニングを受けた者やファシリテータも多い。

今回の会議は3つの期間に分けられている。

- Part A : ソクラテス対話 ; 7月26日 - 28日
- Part B : ワークショップとプレゼンテーション ; 7月28日 - 31日
- Part C : 対話実践と対話哲学のコロキウム ; 8月1日 - 2日

どのパートにも参加は可能であるが、Part CはもっぱらSDの実践家やファシリテータを対象としたもので、コロキウムでの発表文書を事前に提出することが求められていた。前回の第6回会議ではPart Bだけに参加したが、今回はPart Aに参加し、SDの実際を経験することが主たる目的であった。Part B終了後にフランスにおける別のセミナーへの参加を予定したため、残念ながらPart Cに参加することはできなかった。実行委員のホルスト・グロンケ (Horst Gronke) 氏によると、今回の参加者はおよそ100名とのことである。

Part Aについては次節で紹介する。Part Bは事前に申し込まれたワークショップとプレゼンテーションで、一つの時間帯に4~5のセッションが並行して開催された。全部で26セッションが予定されていた。参加者は自分の関心に応じて選択するのだが、例外的ないくつかを除いては単なる発表はなく、グループワークやSDが組み込まれている。また30日夜と31日午前にはキーノートと特別講演に当てられている。

1つのセッションは90分、その間に30分の休憩や120分の昼食がはさまる。夕食後には演劇や音楽演奏などが行われる。公式プログラムはここまでだが、その後は食堂とテラスでビールやワインを囲んでの自由な歓談になる。ここでも、もちろん半分は遊びだが、非公式なSDが行われることがある。

31日夜の実行委員長ディーター・クローン (Dieter Krohn) 氏の総括の最中に、突然、Skypeでイギリスとつながり、SFCPの前代表レニ・サラン (Rene Saran) がスクリーンに登

Schedule of Part A. Socratic Dialogues – 26 July to 28 July 2013**Friday, 26 July**

Registration: 16:00-18:00

Dinner: 18:00

Plenary session: 19:15-21:00

Saturday, 27 July

	Topic	9:00-10:30	11:00-12:30	14:00-15:30	16:00-17:30	19:30
Sokratisches Gespräch I (German)	Rechtfertigt das Ziel die Mittel?					Theatre
Sokratisches Gespräch II (German)	Wissen ohne Worte – ist das möglich?					
Socratic Dialogue III (English)	What is my responsibility to my community?					
Socratic Dialogue IV (English)	Integrity in the work place					
Socratic Dialogue V (English)	What is good taste?					

Sunday, 28 July

	Topic	9:00-10:30	11:00-12:00	12:00	12:30
Sokratisches Gespräch I	Rechtfertigt das Ziel die Mittel?			Plenum	Lunch
Sokratisches Gespräch II	Wissen ohne Worte – ist das möglich?				
Socratic Dialogue III	What is my responsibility to my community?				
Socratic Dialogue IV	Integrity in the work place				
Socratic Dialogue V	What is good taste?				

場し、話し始めた。前回大会の実行委員長であり、そこでお目にかかったが、右も左もわからなかった私をずいぶんと配慮してくださった。現在92歳で、しばらく前から心臓病で療養中とのことである。クローン氏を中心とする実行委員会の心憎い演出であった。

会議全体を通して参加するのはかなりハードであり、SDの専門家以外はPart A, Bだけの参加であったようだ。それでも連日の連続した対話は体力的、精神的に厳しい。私のように、英語もドイツ語もふだんは会話に使わない者にとって、そうした言語で相手が話すのを聞いて、応答をするというのはかなり緊張を強いられる時間であった。

3. SDの実際

3.1. ソクラテス的対話 “What is my responsibility to my community?”

今回は5つの対話が計画された。上掲のスケジュール表からわかるように、2つがドイツ語、3つが英語で行われた。どの対話も、1セッション90分、途中で30分の休憩を挟んで、6セッションの合計9時間である。開催日前夜のレセプションで、参加者各自がテーマと言語にもとづいて、自分が参加する対話グループを決定した。各セッションには平均して12-3名が参加した。私は第三グループ “What is my responsibility to my community?” を選択した。

以下では、その際の私の記録に基づいて、実際のSDを再現してみる。記録の大部分は英語であるが、少々整理したかたちで記すことにする。

Plenary Session

レセプションの後、グループ毎にセミナー室に集まり、明日の対話の準備をする。第3グループは参加者10名、ファシリテータ2名からなる。まず、自己紹介を行い、その後、ファシリテータがSDの規則を確認する。

- ・ Seeking from experience, not from background, not from authorities
- ・ Be honest, express genuine thought
- ・ Be clear, concise (brief/short)
- ・ Listen carefully each other
- ・ Work together and seek consensus

さらに、明日の対話のために、テーマに関連する例として自分の具体的経験を話せるように準備してくるようにとの指示がなされる。

1st Session : Selection of example from experience

参加者は対話の間に用いる名前を決める。ファシリテータが、昨晚考えた実例を提供してくれるようにうながす。誰かを指名することはない。かならずしも全員が提供しなくともよいようで、提供者がいなくなれば次の段階に進む。提供されたのは次の7つである。状況を簡単に説明し、その際に自分が実際にどのように決定したのかをはっきり述べるのが求められる。確認のために、提供者の名前と実例を要約した名称を組にして、フリップ・ボードに書き出す。

- ・ 実例の提供者：実例につけた呼び名
- ・ Veerle: Mother with paralyzed child
- ・ Younes: Family identity
- ・ Regina: Neighborhood problem
- ・ Saar: Between myself and sister thesis
- ・ Antje: Elderly squatters
- ・ Akira: Cleaning up the classroom
- ・ Marta: Career and family conflict

このなかから対話のための例を選び出す。興味深さ、一般性などの観点から、あれがいい、これがいいとさまざまな意見が出て、その理由が示される。本来のSDではこの決定にも合意が求められるのだが、時間的制約があるせいか、候補を絞り込み、最後は多数決で決定し、Veerleの例“Mother with paralyzed child”が選ばれる。

2nd Session : Confirmation of the selected example in detail

選ばれた例について、提供者がより詳しく説明し、さらに他の参加者が質問して、例と決定状況を、全員が理解できるように明確化してゆく。最後にはそれを簡潔な文にまとめる。これがこれからの議論（遡及的抽象）の基になる。

Five years ago there is a single mother with three children. One child, a daughter, was hit by car, when 17 years old, became paralyzed. The mother has five girl friends in that situation for the long run. The mother has help for others. She has some girls. At the beginning

there was no help from the government. We had a long discussion about that we should do, what we were to do. So I choose to need with her every month and help her with the daughter's study. The daughter stays at home.

3rd Session : Decision

状況を明確化した文に基づいて議論する。最初に提案者がテーマに関して、例に基づいて、自分の判断を文章化する。他の参加者は、同じ例に関して自分の判断を明確化して、最初の判断の修正案を出してゆく。修正に合意が得られれば、それを書き出す。

- ・ 1st version: My responsibility to my community was to find the way to take care of my friends.
- ・ Revised version S1: My responsibility to my community was to discuss about what should be done, and what we are able to do, and what we are willingly to do or continue to take care of my friend.
- ・ Revised version S2: My responsibility to my community is to co-operate with community members to take care for other community members.

4th Session : Justification

判断に対する正当化・理由づけの議論を展開する。

- ・ S1: Because I would like my friend to the same for me.
 - Because I find it a necessary condition of friendship to find ways to take care of each other.
- ・ S1 + S2: Because it makes me happy if I can help someone of my community.
- ・ S3: Because I have feeling responsibility before you can take responsibility.
 - Because I have to feel responsible before you can take responsibility.
 - Because I like her in essence.
 - Because it is my moral duty, because, it is a moral requirement.

5th Session : Justification continued

正当化の議論を継続して、判断の原理を見出す。

6th Session : Meta-Dialogue

テーマに関する議論はいちおう終了し、一種のメタ・ダイアログを行い、議論の反省をする。最後に、議論を振り返って、提供された例に対する自分の判断とその理由を簡潔に（2文以内で）まとめるようファシリテータから指示がある。私のまとは次のようなものである。

My responsibility to my community is to find the way for well-being of the other persons and

their close handicapped, within my ability (which includes competence, taking some burdens and so on; i.e. what I can do). Because I am affected obligatory the situation he/she is involved, and have feeling to response (or answer) to it.

3.2. SDの分析

前章で示した遡及的抽象の方法をこの場合に適用するとその一つのバージョンは、およそ次のようになろう。

1. 判断：子どもが交通事故で障害を負ってしまった若い友人がいたので、その友人を含むわれわれの仲間が相談し (S)、日常的に彼女の手助け (彼女の別の子どもの面倒を見るなど) をすることにした (J)。
2. 応答1
 - ・ 問い：その判断 (J) はどのような事情、規則 (R) に基づいているか？
 - ・ 答え：彼女の状況を考えると、コミュニティーの仲間が手助けするのは善いことである。コミュニティーの仲間が困っていたら助けるべきである (R)。
3. 応答2
 - ・ 問い：それは負担になるが、そうした負担になろうとも、コミュニティーの仲間が困っていたら助けるべきだ (R) という重要な理由、あるいは原理 (P) はなにか？
 - ・ 答え：コミュニティーの仲間は他の仲間と共同する責任 (義務要求) がある。コミュニティーの仲間を助けることは、この責任を果たす (義務要求に応じる) ことである (P)。
4. 追加：コミュニティーの仲間である彼女の手助けをするという判断Jを受け入れるのは、コミュニティーの仲間は、仲間であることから生じる責任を果たす (義務要求に応じる) べきであるという原理Pを採用するからである。この原理Pは、今の状況Sにおいて、コミュニティーの仲間が困っていたら助けるという規則Rの根拠となっている。

全体を通してみれば、この対話では最終的な合意には至らなかったように思われる。コミュニティーのメンバーに配慮するということがわれわれの責任であり、Veerleの判断にさしあたり異論はない。ただ、第3セッションの修正に見られるように、責任内容が何であるかには意見の相違が見られる。第4、第5セッションの判断の正当化では、われわれにそうした行動を促すもの、責任の根拠をどこに求めるかに大きな相違が残っている。その原理を感情 (“happy”)、責任感 (“feel responsible for”) に見るのか、道徳的要請 (“moral requirement”) に見るのか、あるいは相手との特別な関係 (“I like her in essence”) に見るのかである。

4. 結論にかえて

4.1. 国際会議に参加して

ネルズン-ヘックマンの伝統におけるソクラテス的対話、すなわちSDにはずいぶん以前から関心を持っていた。その大きな理由は、ベルリン自由大学哲学部にあるハンス・ヨナス研究センターで、ヨナスの『責任という原理』のモチーフは引き継ぎつつ批判的に対決しようとするメンバーがSDのトレーニングを経ていたり、あるいは自らファシリテータであることを知ったからである。彼らは、ヨナスの「責任という原理」のモチーフは維持しながら、自然哲学的形而上学ではなく、対話論的あるいは言語遂行論的にそれを変換しようとしている。それを支えるのがおそらくはSDの経験であろうと目星をつけて、SDの文献を読んでみた。しかし、SDは実践があつてのものである。文献を読むだけでは、いまひとつしっくりしなかったのだが、今回の国際会議ではようやくそのSDを経験できたのである。また、ワークショップでは、SDのさまざまな適用や新しい動向を知ることができた点も大きな収穫であった。たとえば、政治的参加におけるSDの応用、刑務所での囚人との一対一の対話、対話プロトコールのオブジェクト指向による分析方法、オランダにおける活発なSD実践などである。

4.2. SDの方向性と研究課題

最後に、この報告をまとめるにあたって改めて気がついたことを述べておく。

2007年にはユネスコ『哲学 自由のための学校』(Philosophy A School for Freedom) (以下『哲学』)を公刊し、哲学教育の意義を広く訴えている。これはユネスコは1995年の「哲学のためのパリ宣言」を踏まえたものであり、哲学と自由が深く関連していることを主張し、自由と厳密な思考を学ぶことが哲学であると捉えている。そして哲学教育をより進めるために、大人や青年の哲学や、批判的思考の促進もともより、子どもの哲学 (philosophy for children : P4C) や子どもとの哲学 (philosophy with children : PwC) の必要性を提言している。アメリカのリップマン (Mathew Lipman) やフランスのブルニフィエール (Oscar Brenifier) などとともに、ネルズンのSDも取り上げられている。それに呼応してか、SDの側も最近、学校における哲学教育や子どもとの哲学実践 (Philosophieren mit Kinder) が重要な研究テーマになっている。もちろん、それは、最初に紹介したように、ネルズン - ヘックマンの伝統におけるSDのそもそも志向である。しかし、UNESCOの『哲学』に見られるように、哲学教育、批判的思考のトレーニングや子どもとの哲学のさまざまな方法が提案されている時代、SDは他の方法とどのように違い、どのような特徴を持つのかは、いっそう問われることになる。

他と区別されるSDの特徴は、ネルズンが提唱し、ヘックマンが改定した「遡及的抽象の方法」に基づく点である。だからこそ遡及的抽象の方法やそれに付随する対話規則、対話方法の

研究がなされてきたのである。しかし、上のような現代的な動向を踏まえてみると、ネルズンの遡及的抽象の方法に内在する問題が改めて見えてくる。

第一は対話性である。ネルズンは、アイデア説を語るソクラテスではなく、徳や正義について対話するソクラテスにソクラテス的対話の意義を見出した。しかし、ネルズン自身の遡及的抽象の方法は、現在風に言えば、主観的な意識哲学の枠内にとどまっており、本質的には対話性に開かれてはいないのではないかという疑念が残る。

第二は理性性である。SDは「理性の自己信頼」という人間の理性へのきわめて強い信頼に基づいている。そうだとすれば、SDによって「子ども（と）の哲学」は本当に可能だろうか。今回の学会のあるワークショップで、SDの教育実践への適用を精力的に進めているファシリテータ、ギセラ・ラウパハッハーストレイ（Gisela Raupach-Strey）女史にこの点を尋ねたのだが、基本的には子どもも十分にSDを行うことができるとの回答であった。実際にヴァルケミュール学校で行われていたのだが、当然といえば当然の回答である。しかし、それが可能になる条件は一体何であったのか、また何であるのかは問われる必要がある。

第三は、自由や民主主義という政治との関係である。ネルズン自身は戦闘的に社会主義運動にコミットし、SDは政治教育の重要な道具であった。しかし、ネルズンは政治原理としての民主主義を極めて強く攻撃し、むしろ「十分に教養ある者」によって「指導」される政治のあり方（「指導者原理」）のようなものを主張した。これは逆説的に、プラトンの監視国家を想起させる。ここには大きな矛盾があるように見える。この点はネルズンの後継者にどう受け入れられ、ヴァルケミュールの教育プログラムに影響しているのか。戦後、ヘックマンはSDを政治運動からは切り離れた。だが、ヘックマンにしてもその「権威性」を批判されている。グロンケ氏はネルズン・サークルの潜在的ドグマチズムや権威性の根深い理由が「直接的認識」というネルズンの教説にあるのではないかと推測している。「なんらかの直接的認識を獲得していると信じている者はその認識の真理を、そしてネルズン自身が主張するように、（孤独な）心理学的自己観察（いわゆる「主観的演繹」）によって認識すると信ずる者は、他の対話参加者への関係を余計なものとしたり、二次的な役割しか与えなかったりする。他の対話パートナーが提出するかもしれない批判的議論は見下され、それには単なる補助的機能しか見出されなかったりする」（Gronke 2012, S. 140-141）¹⁹⁾。

これらの3つの問題は相互に密接に関連し、「遡及的抽象の方法」に行き着く。しかしこれがSDの特徴であり、核心であるとすれば、SDはどのような方向を進むのであろうか。その解明はこれからの課題である。これを見出すことができたことが、連日の猛暑の一週間を他の参加者とともにベルリンでSDを経験した成果である。

〔附記〕

本発表は、平成25年度科学研究費補助金基盤研究（C）「グローバルかつ長期的な未来世代への責任を志向する教育学の基礎的研究」（課題番号23531025）による研究成果の一部である。

注

- 1) SDに関しては、Dieter Krohn(1996)、Birnbacher and Krohn(2002)、寺田(2002)、寺田(2001)、太田(2005)、太田(2012)などを参照。なお、『臨床哲学のメチエ』(大阪大学文学部臨床哲学・倫理学研究室編)にSDの理論・実践に関する多数の紹介記事、実践報告、翻訳などが掲載されている。
- 2) 今回の国際会議については、日本教育学会第72回大会一般研究発表A-1 教育理論・思想・哲学(b)(2013年8月25日、一橋大学)と教育哲学会第56回大会一般研究発表(2013年10月12日、神戸親和女子大学)で部分的に報告した。
- 3) リード(2010)参照。こうした事情のせい、フリースやネルゾンの哲学説に関する研究はきわめて少ない。我が国においては、早稲田大学の速水治郎教授による一連のフリース研究があるに過ぎないようである。
- 4) Draken(2011, S. 26-7)より再引用。
- 5) 当時の学校教育に満足せず、自らの教育理念を実現すべく都市から離れた場所に寄宿舎学校を設立して教育にあたるという点で、ネルゾンのヴァルケミュール学校はたしかにドイツにおける新教育運動(Reform Pädagogik)に数え入れられよう。しかし、ネルゾンの「ソクラテス的方法」がこの学校での教育でどのように作用したのか、それが他の新教育運動の理念とどう共通し、また異なるのかは教育史的に興味ある研究課題である。ヴァルケミュール学校が長続きせず、戦後も再建されなかったために詳細な研究はまだないと思われる。また、亡命地での学校は、その地の社会からは相対的に隔離されているために、皮肉なことに純粋に田園寄宿舎の機能を学校にもたすことになった。さらに、単に教育史的な関心だけでなく、学校教育における「ソクラテス的方法」の実践、あるいは今日注目されている「子どもとの哲学実践」(Philosophieren mit Kindern, Philosophy with Children: PwC)の先駆けという意味で教育思想的にも重要な研究課題である。ここではさしあたり、Gronke(2012)の叙述を参照している。
- 6) Saran and Neisser(2004)を参照。この点に関しては、SDに関する実践報告や理論的研究で必ず確認される。論者によって述べ方や力点に違いはあるが、基本的な点は変わらない。
- 7) 「ソクラテス的会話」という表現がまだ定着していないと思われるため、便宜上、ここでは両者を区別せずに「ソクラテス的対話」という表現を用いる。また、「ソクラテス的対話」を標榜する対話技法ないし議論技法はさまざまあるが、そのなかでネルゾンとヘックマンによって開発された技法を際立たせるという意味で、「ネオ・ソクラティック・ダイアローグ」(Neo sokratische Gespräch: NSD)と呼ばれる場合がある。この用法はLoska(1999)に始まるようであるが、紛れの余地がなければ、「ネオ」をつけずにSDを用いることにする。
- 8) 本節は主にGronke(1996)による。太田(2012)も参照。
- 9) きわめて単純で妥当な規則のように見える。だが、これらがSDに関してどのような機能を果たしているかは、SDの実践者にも研究者にも検討する価値がある問題である。
- 10) ネルゾンの論文集(Nelson 1975)のタイトルにもこれが冠されているように、ネルゾン哲学の強い理性志向を示している。
- 11) Nelson(1970, S. 271)。
- 12) しかし逆に、「最初の問い」とはどのような性格のものかも積極的に示す必要がある。Kopfwerk Berlin(2006)はこれを解明している。
- 13) ネルゾンはその著作の多くの箇所「遡及的抽象の方法」と関連するテーマに触れているが、彼自身の論述に不分明なところも多く、解釈や評価が別れるところである。Berger. et. al(2011)所収の論文などを参照。以下では寺田(2001)によるまとめを援用した。
- 14) 寺田(2001)、Kopfwerk Berlin(2006)参照。
- 15) Kessels(1997)。

- 16) Kopferk (2006)。
 17) 今回の会議はきわめて配慮が行き届いており、かなり詳細な案内“Navigator”が事前にメールで送られ、会場では製本されたものが配布された。この章の記述は主にこれによる。
 18) 団体のウェブサイトそれぞれ<http://www.philosophisch-politische-akademie.de/>, <http://www.philosophisch-politische-akademie.de/gsp.html>, および<http://www.sfcg.org.uk/>。
 19) ドイツの新教育運動 (Reform Pädagogik) には、その革新性とは裏腹に、根深い権威主義的がよく指摘される。ヴァルケミュール学校については、SDによる教育方法だけではなく、政治的観点やその性格を含めて検討してみる必要がある。グロンケ自身は、以前からこの点についてネルゾン、ヘックマンの立場を批判してきた。むしろ、アメリカのプラグマティズム、とりわけC. S. パースを批判的に受容したK. -O. アーベルの超越論的言語遂行論に、ネルゾンの限界を超えたSDの方向を見ている。その点に着目すれば、グロンケの提案する子どもとの哲学実践は、デューイの影響を受けたリップマンの「探求の共同体」(Community of Inquiry) に接近することになるうか。

参考文献

- Birnbacher, Dieter and Dieter Krohn eds. (2002) *Das sokratische Gespräch*: Reclam.
 Draken, Klaus (2011) *Sokrates als moderner Lehrer*: Lit Verlag.
 Gronke, Horst (1996) “Die Grundlage der Diskursethik und ihre Anwendung im Sokratischen Gespräch,” in Dieter Krohn, Barbara Neißer und Nora Walter ed. *Diskurstheorie und Sokratisches Gespräch*, Frankfurt am Main: dipa-Verlag.
 ——— (2012) “Kinder philosophieren – Wenn Kinder in einer sokratische Schule gehen …,” in *Kinder Philosophieren*: Lit Verlag, pp. 115–152.
 Heckmann, Gustav (1993) *Das sokratische Gespräch – Erfahrungen in philosophischen Hochschulseminaren*: dipa-Verlag. Mit einem Vorwort zur Neuausgabe von Dieter Krohn, Herausgegeben von der Philosophisch-Politischen Akademie.
 Kessels, Jos (1997) “Das Sanduhr-Modell – Methodik des Dialogs –,” in Neißer, Barbara, Dieter Krohn, and Nora Walter eds. *Neuere Aspekte des Sokratischen Gesprächs*, Frankfurt am Main: dopa-Verlag.
 Kopferk Berlin (2006) 「ソクラテック・ダイアローグの方法論」, 『臨床哲学』, 第7巻, 77–104頁。
 Dieter Krohn, Barbara Neißer und Nora Walter ed. (1996) *Diskurstheorie und Sokratisches Gespräch*, »Sokratisches Philosophieren« Schriftenreihe der Philosophisch-Politischen Akademie Band III, Frankfurt am Main: dipa-Verlag.
 Loska, Rainer (1999) *Lehren ohne Belehrung. Leonard Nelsons neosokratische Methode der Gesprächsführung*: Klinkhardt, Julius.
 Neißer, Barbara ed. (2013) *Sokratik und Urteilskraft in pädagogischer Praxis*: Lit Verlag.
 Neißer, Barbara and Udo Vorholt eds. (2012) *Kinder philosophieren*: Lit Verlag.
 Nelson, Leonard (1970) “Die sokratische Methode (1922),” in *Die Schule der kritischen Philosophie und ihre Methode*, Hamburg: Felix Meiner. (Gesammelte Schriften Bd. III).
 ——— (1975) *Vom Selbstvertrauen der Vernunft. Schriften zur kritische Philosophie und ihrer Ethik*, Philosophische Bibliothek Band 288, Hamburg: Felix Meiner.
 ——— (1971) “Vorrede und Einführung zum Sammelband: Die Reformation der Gesinnung durch Erziehung zum Selbstvertrauen (1917),” in *Sittlichkeit und Bildung*: Felix Meiner. (Gesammelt Schriften Bd. VIII).
 太田明 (2005) 「対話と討議 (1) —ソクラテス的対話と討議倫理—」, 『一般教育論集』, 第29号, 95–105頁,
 ——— (2012) 「ソクラテス的対話において「聞く」こと」, 『論叢』, 第52巻, 3–16頁。

- リード, C. (2010) 『ヒルベルト—現代数学の巨峰』, (岩波現代文庫), 岩波書店, (彌永健一訳).
- Saran, Rene and Barbara Neisser eds. (2004) *Enquiring Minds: Socratic Dialogue in Education*:
Trentham Books.
- 寺田俊郎 (2001) 「対話と真理—ソクラティック・ダイアローグの理論的前提—」, 『待兼山論集. 哲学編 (大阪大学文学部)』, 第35号巻, 47-61頁.
- (2002) 「レオナルド・ネルゾンのソクラテス的方法」, 『臨床哲学』, 61-72頁.

(おおた あきら)

Practice of Socratic Dialogue and its future Orientation: Participating in the 7th International Conference: Philosophizing through Dialogue

Akira OTA

Abstract

Leonard Nelson (1882–1927) was a German philosopher, pedagogic and politically engaged with the focal points logic and ethics. He proposed a philosophizing- and philosophy-teaching method, “socratic dialogue” (SD), in a speech of the same name 1922. This socratic method is, unlike ordinary platonic-socratic dialogue, a sort of group conversation, in which every member has equal opportunity to speak and as a “midwife” encourages other members to speak in order to develop the thinking.

The 7th International Conference of SD, organized by PPA, GSP, SFCP, was held on 26 July – 2 August 2013 in Berlin, to which I had a chance to attain.

The aim of this paper is to introduce the Conference and especially SD-sessions, and to find a prospect of SD in theory and practice.

The outline of this paper is as follows: after a brief explanation of the background of SD, including its history, rules and philosophical foundations (1), I report the Conference (2) and analyze closely a SD session I participated to (3). At the end, I review the three issues of SD to be considered from now, suggesting that they are rooted in “the regressive method of abstraction”, and show the outlook of research on it (4).

Keywords: Leonard Nelson, socratic dialogue, method of regressive abstraction, philosophy for children (P4C)